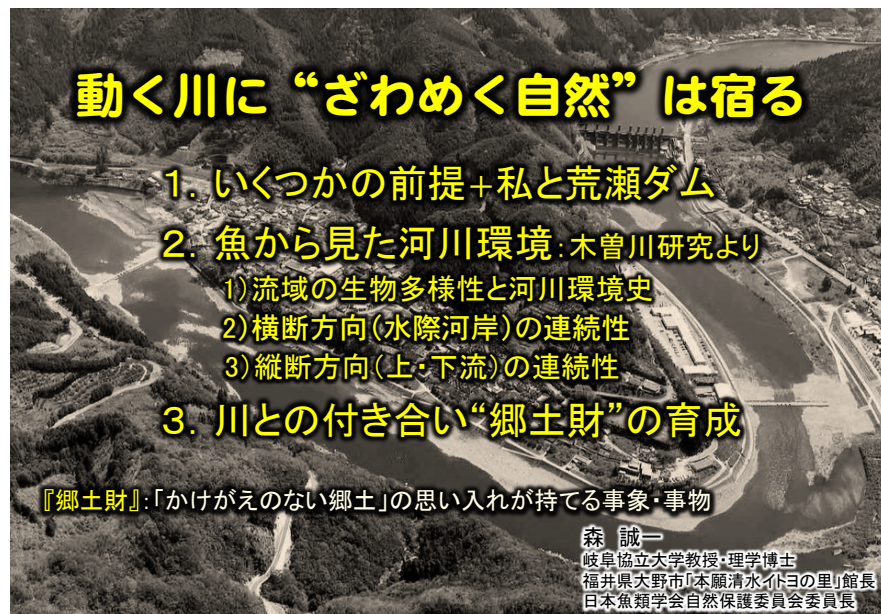




『日本＝川クニ論』

- 1) 国土の多くは山林に被われ、「山国」である
- 2) 山があり谷がある＝『多くの川(伏流水)がある』
＝「豊かな山があり、清らかな川ができる」
- 3) その川に沿って(沖積平野、扇状地、河岸段丘)、人の生活・集落がある
「洪水を起こしながら例えば、肥沃な濃尾平野を作った」＝『生活の場』
- 4) 生活・農業・工業用水の供給(高度経済成長の礎)＝『生活の基盤』
- 5) 南北に長く、2つの海をもつ多様な淡水系＝『豊富な淡水生物相』

結論: 日本は『川の国』である。

河川流域が「郷土財」のベースとなる

郷土財



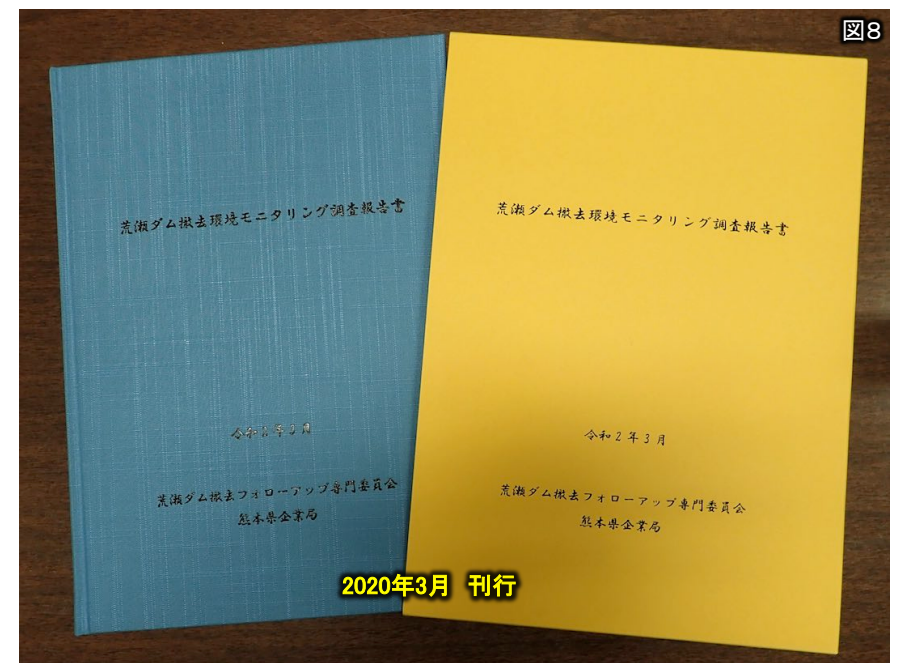


図9

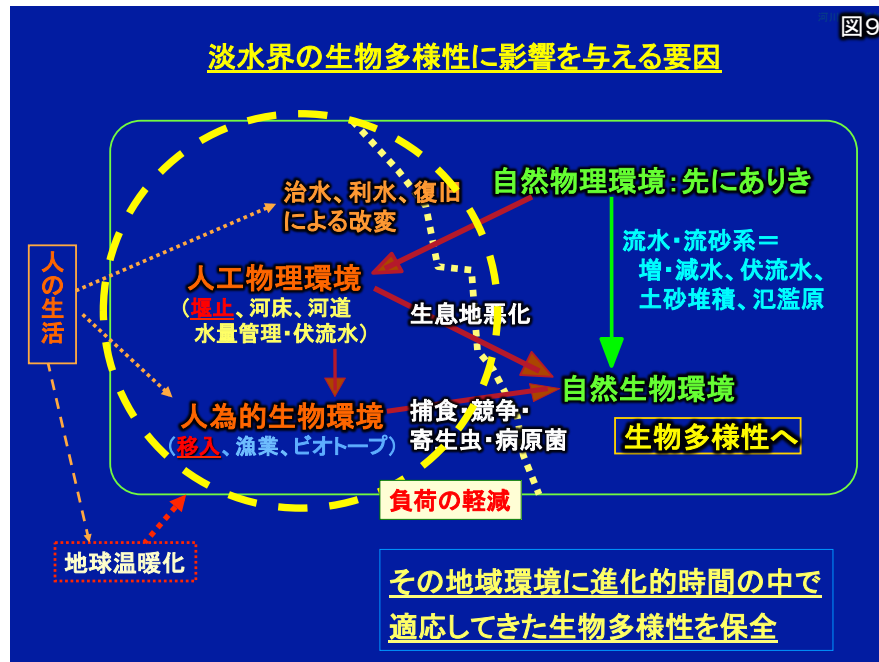


图 1-1



2) 分析对象

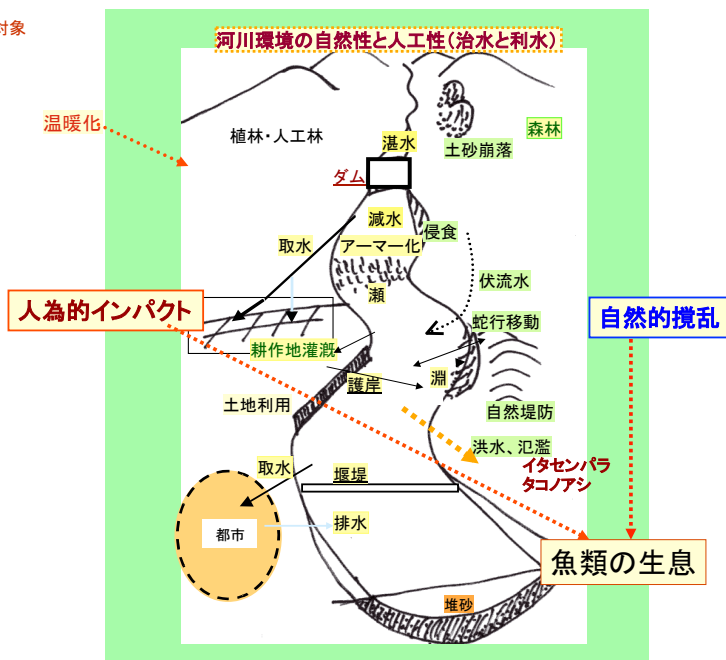
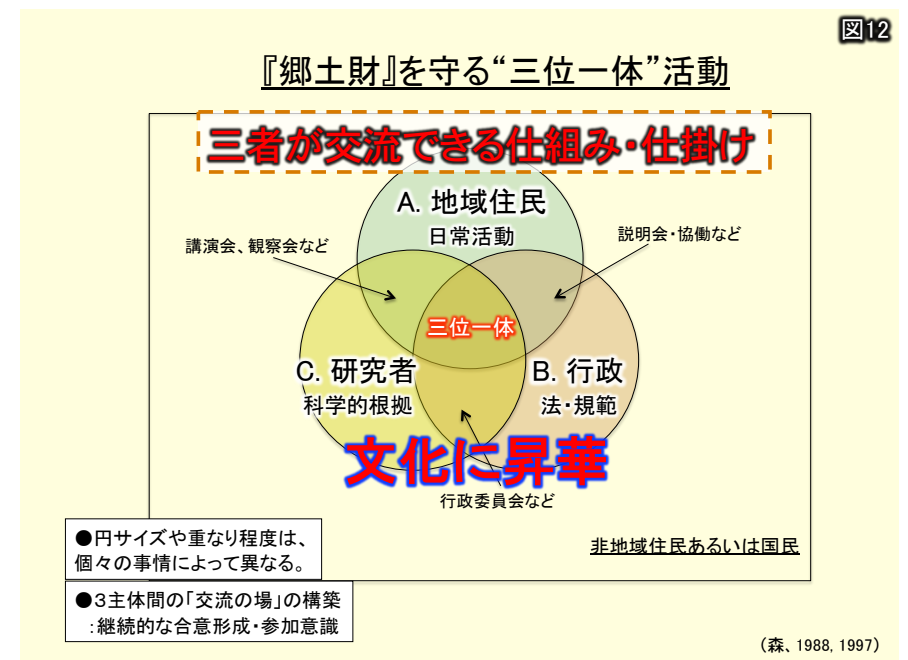


図10

図12

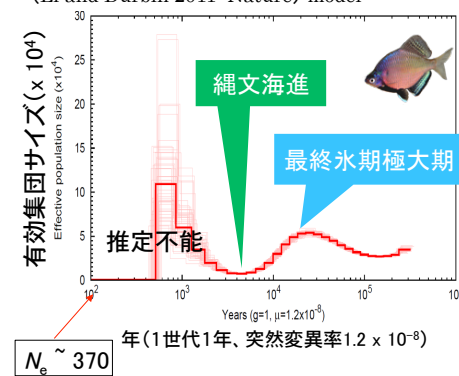




横断方向(水際河岸)の連続性
歴史的人口動態と河川環境史

濃尾平野の象徴種・絶滅危惧種であるイタセンバラの歴史個体群動態を、全ゲノム解析アプローチから明らかにする。

Pairwise Sequentially Markovian Coalescent (Li and Durbin 2011: Nature) model



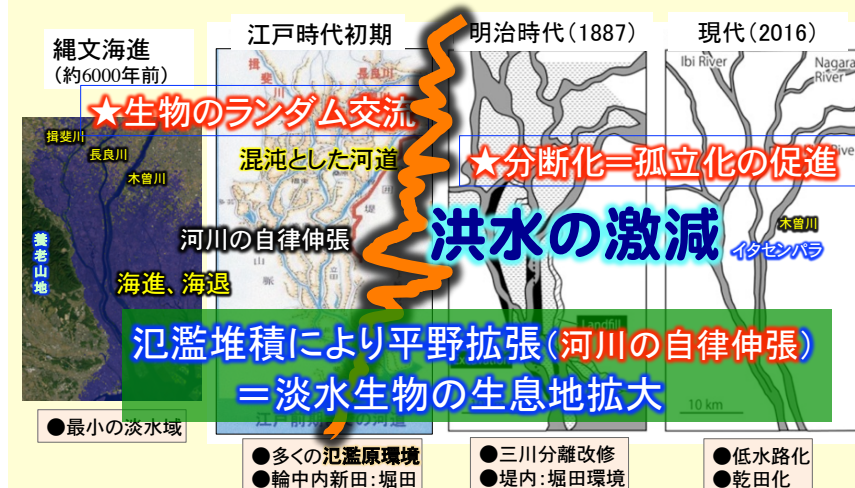
※絶対年代の推定は、計算に用いた突然変異率に依存



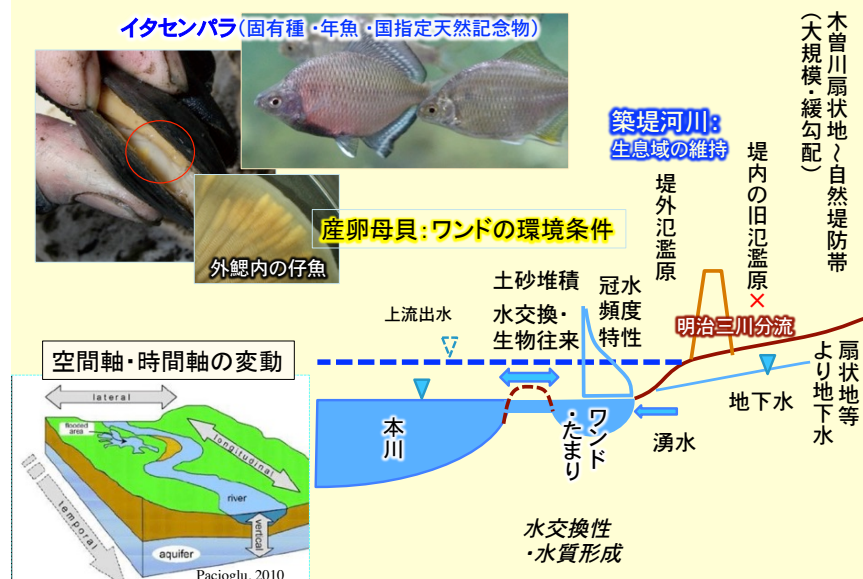
図 4-8 濃尾平野における自噴帯の分布(昭和 38 年頃)
(『濃尾平野の地盤沈下と地下水』より作成)

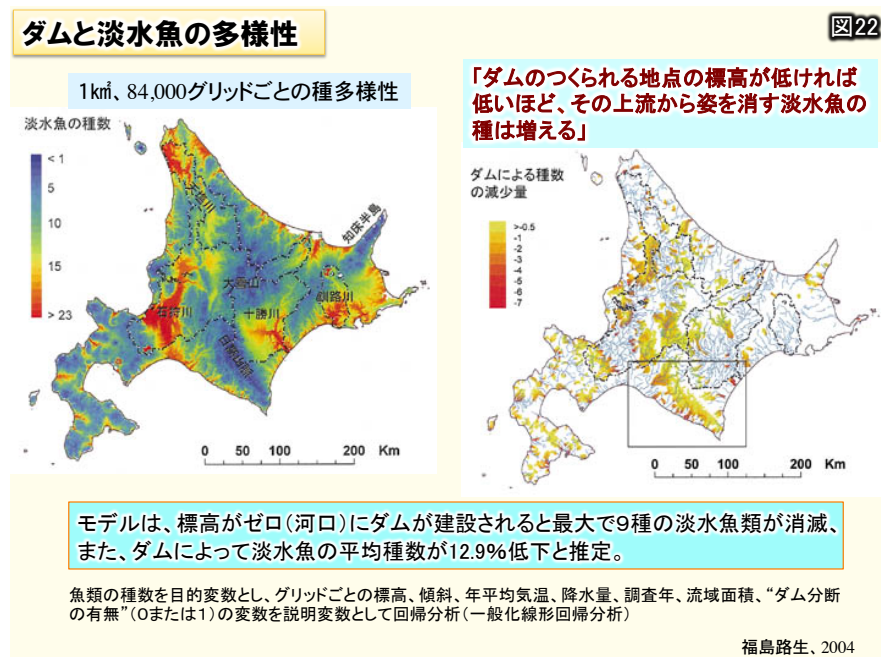
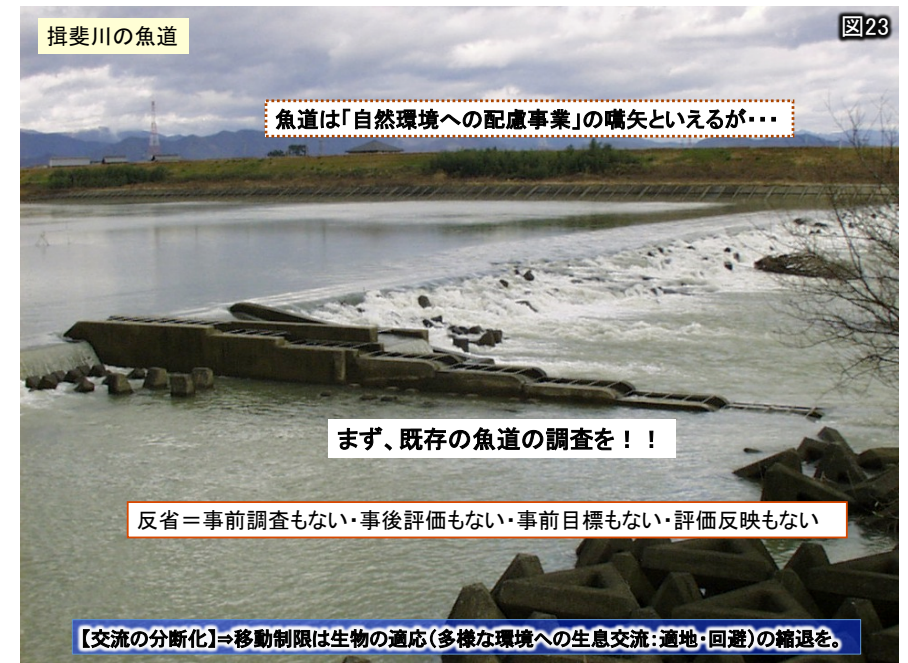
河川環境史(地域スケール)と生物の集団構造の形成 図14

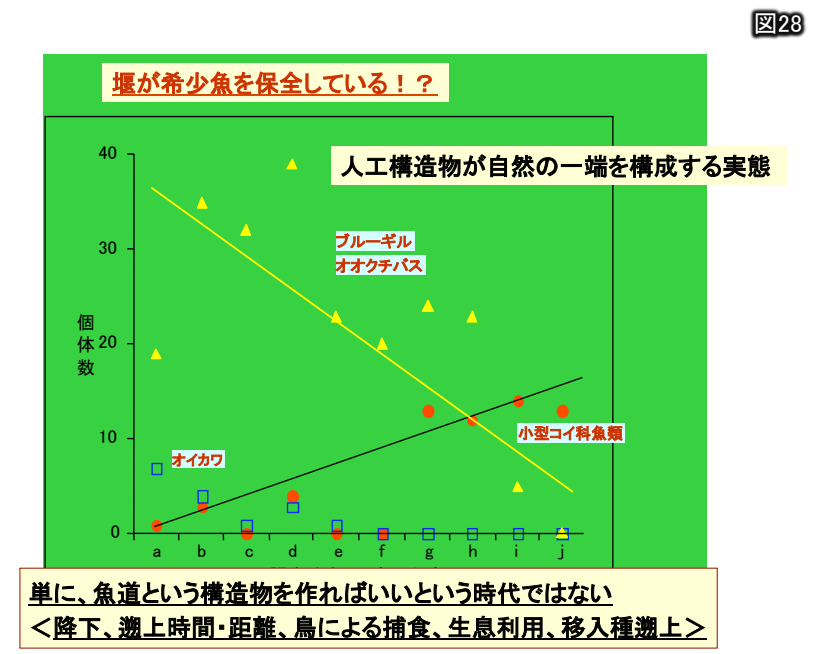
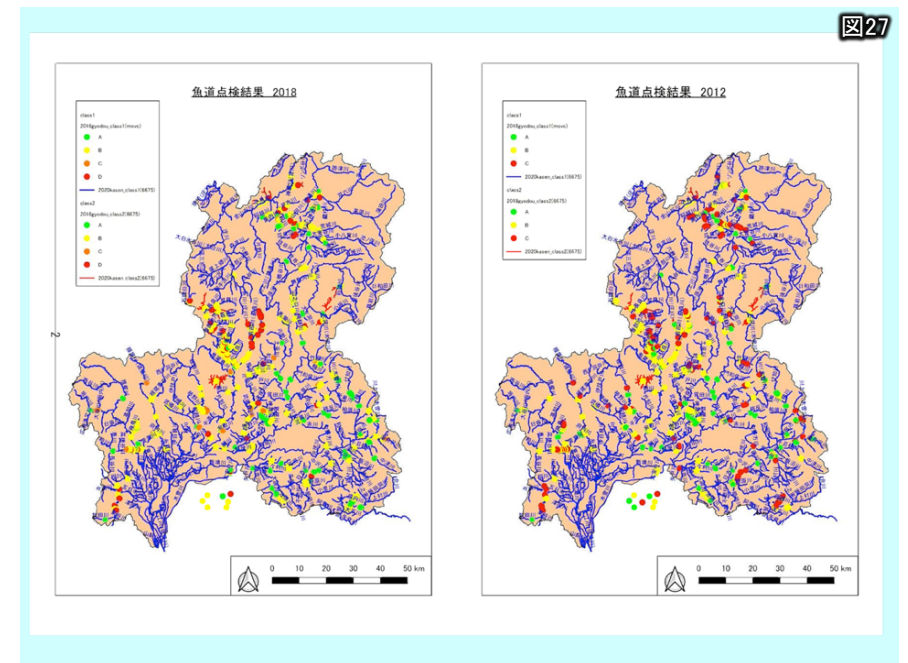
集団はいかに形成され、激減したのか?回復は?



木曾川の河道内氾濫原構造とイタセンバラ 図16









“流域治水”を背景にした河川整備基本方針の策定

●20世紀末比で21世紀末には、降雨量が1.1倍、洪水発生頻度2倍と試算
●時間50mm以上の降雨回数は、30年前と比して1.4倍に増加

気候変動の影響

速やかに対応

○ 今既に激甚化している水災害に対応するため、国・都道府県・市町村が早急に対応すべきハード・ソフト一体となった対策の全体像を明らかにする「**流域治水プロジェクト**」を**速やかに実施** (令和2年度内に全1級109水系で策定)

[国管理河川で戦後最大規模洪水に、都市機能集積地区等で既往最大降雨による内水被害に対応]

将来の気候変動(降雨量の増大等)を見込んだ治水計画の見直し

将来の気候変動を見込んだ更なる対応

○ 現行計画よりも増大する降雨等(外力)に対応するため、河川対策の充実をはじめ、上流・下流や本川・支川の流域全体を俯瞰した、関係者による**流域治水を更に拡充**

法的枠組「**流域治水関連法案**」の整備が必要

1. 流域治水の計画・体制の強化 [特定都市河川法]

◆ 流域水害対策計画を活用する河川の拡大

ー 市街化の進展により河川整備で被害防止が困難な河川に加え、**自然的条件**により困難な河川を**対象に追加**(全国の河川に拡大)

◆ 流域水害対策に係る協議会の創設と計画の充実

ー 国、都道府県、市町村等の関係者が一堂に会し、官民による**雨水貯留浸透**対策の強化、浸水エリアの**土地利用**等を協議

ー 協議結果を流域水害対策計画に位置付け、確実に実施

流域住民の参画

国交省資料2021.4